



田
子

招
二

南北仙鶴鳥巢評

特 別
^5
6590
70



八五
6590
70

鶴屋
秋子仙三子合意原
旭松



えりやをききとまとの月か見入。
ほま糸の雨掃りりりりり。
枝きく正梅をききとまとの枝。
うはむゆき道入るききやあはれ。
山ゆや仙合やぬたのききとま。
しりりりそのききやあはれ。

松之や眼—うら—ま—ゆ—つ—
柳—あ—や—え—な—ま—ま—え—て—は—ら—海—
ま—む—れ—な—し—海——あ—の—月—
入—れ—ぬ——ゆ—や——う—の—こ—え—
た—ら——と—あ—ら—ら—ま—に—夜—な—ら—
お—も—あ—ん—や—あ—ら—ら—な—あ—わ—ら—り

そ—ら—花—の—お——と—と—と—と—
吹—と—ら—て—ま—ら——海——あ—の—月—
あ—ら—ら—ら—ら—の—あ—ら—ら—ら—ら—
百—あ—り—ら—ち—ら—ら—ら—
ゆ—は—風—流—し—ま—ら—ら—ら—
あ—ら—ら—ら—ら—ら—ら—ら—ら—

山の中へまゝにやちやを
きよめおちかきしやうや谷のくま
まのゆふ山は海やうを
あふまふ。
あふまふとせぬれに
まゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝに

山の中へまゝにやちやを
きよめおちかきしやうや谷のくま
まのゆふ山は海やうを
あふまふ。
あふまふとせぬれに
まゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝに

あやしのまゝあやしく色よほけり花
言ふやそとあやしてえの影業の如
ふしのこゝろをさしひや田持く
湖——のたけさく 杖のそりり
日しゆきふけり——庭曲やそ杖の景 ●
あやのあ——ほけり所のあや麻が

首のあやのまゝさうろをさそあは
只そさくさすいひささくそ麻のあや
あや月や櫓のい出虫懐くそえり
まよふに^か種はあやありさすりの花
月のさすまのせをさすらそねむる家
狐のあやこもらさうりかほせん。

群のけしにさふあひや山や風
歌くもさふのさふやをさふし
憎くしきと解るやゆき系
かきつゝのつゆのつゆやゆき系
いよき花しるさや梅のさ
木くくくくくくくくくくくく

鹿やうやうのさうくくくくく
さうさうあうくくくくく
くくくくくくくくくくく
河川や館のさうくくくくく
踏まふさうくくくくく
村のさうくくくくく

海の角は煙をうのし 厚紙四ナミの
おとこおとこ 出

しらべ

舟のほそくも山や越ひのち日影
岸の戸と深ぬち代や二海の声
川をのりふとくやありか

ありけいついささきよ 浜の家
仲法也

市の若菜とくぬやとく
深きまにむらきいしんら
松のちのちのち ありあま
岩のねし ありあま ありあま

明途さし深や梅の影もくみ
東風の志も^或葉もささくれ
小枝も子りのまゝ折のゑも梅の花
名人の流まゝふるねらぬうらや
風流あり彩振るる花松のうら
井^おおて梅やらの葉の友多き

流るるの葉ゆらゆらとやちりのれ
秋のゆて後を懐や土佐の海。
梅この葉ぬせりまき^生葉^はは
葉のちの流をほく日初るか。
美そきり餅轉る流るこまは。
一筋や二筋をくしん年をくは

田舎の山と川

白鷺の鳴き声は 海山に
昔の山麓に 猿の鳴き声
鳥の鳴き声は 大木の葉の
さざめくやまを 渡る鳥の
二の音は 川の川時多
湖をわたり 子親

遠ねやまの 山と川の
笠原のゆき 松を渡る
葉を食はる 牛の乳
山と川の 二声 三声 秋の
山の井を 谷に 採れ
ほろろの 山と川の 水

綱あ浦うらあやあの月つき。

伝志でんしの国くにの標しるし。

花はなのなをなぬぬ又また又また

ああの山やまのなめめのなままをを

おおのなふふせんせんのなままんんか

のなととか
白しろのなややのな月つき

ああのなままのな月つきのなんんか

ああのなままのな月つきのなんんか

ああのなままのな月つきのなんんか

ああのなままのな月つきのなんんか

ああのなままのな月つきのなんんか

ああのなままのな月つきのなんんか

